

西安旧飛行場跡地発見の唐三彩窯に関する覚書

はじめに 西安旧飛行場跡窯跡は、西安市の西郊に位置し、唐長安城西市の北側の醴泉坊の一角に営まれている。三彩窯跡の発見は、1998年6月、民間の文物収集家が、西安旧飛行場滑走路跡地のビル建設現場の掘削廃土から三彩片、陶器片を採集したのが始まりで、これをきっかけとして、度々採集がおこなわれ、窯跡の存在を示す遺物類（素地・焼成失敗品・範型・窯道具等）が大量に発見された。事の重大性に鑑み、1999年の春には、陝西省考古研究所が発掘調査をおこない4基の窯跡を検出している¹⁾。発掘報告書は未刊であるが、発見した民間の研究者グループによって、採集遺物の紹介やその意義についての論考が既に雑誌や図録で紹介され、広く国内外に知られている²⁾。採集資料という限界があり、当窯跡に対する評価は、研究所の正式発掘報告を待ち、収集品の再評価を含めて論じなければならないのは承知しているが、奈良文化財研究所と河南省文物考古研究所とが共同研究を実施している河南省鞏義市黄冶窯の產品との比較検討をも含め、この窯跡の性格について論ずることにする。

胎土と器種・窯道具 暗褐色系の陶胎と白色瓷胎の両種があり、前者が圧倒的に多く、釉薬を掛けるものについては瓷汁による化粧を施す。後者は量的に少なく、公表されているかぎりでは、瓷土を胎とする俑類はなく、日常生活用具類の一部（盒子・小型無頸壺・双耳鉢・陶枕）や建築資材の宝相華紋磚に限られるようである。

器種には、日常生活用具類と俑類、建築資材、その他がある。日常生活用具には、鞏義黄冶窯産と同形態の双耳鉢・豆・小型盤口瓶・小型無頸壺、盒子、唾壺、小壺類、陶枕が、俑類には、人物俑（女侍俑・男侍俑・鴨抱俑）、羅漢俑、騎馬男俑や天王俑・十二生肖俑等の鎮墓俑類、動物俑（馬・駱駝）が知られている。その他、前述した建築資材の磚、買地券と思われる「・・天宝四歳・・・□祖明・・」と刻された陶質板等があり、この窯跡の操業年代の一端を知る事ができる。

重ね焼きに用いる窯道具は、鞏義市黄冶窯と同じものが使用されている。三叉トチンには3種あり、一つは、小型の型作り品で片面が平滑で他面に上向きの突起を付す三叉トチンで、もう一つは、捻り棒を三叉にし、片面

の支肢先端だけに突起を付すやや大型品、これらは椀等の底部外面に施釉しないものに用いる。もう一つは、横断面が長三角形でドーム状に反りを持つ分肢を三叉にし、尖った分肢の背と先端で器物を支える三叉トチンである。棒ツクは、各種サイズのものがあるが、黄冶窯で確認されている焼成用棚材及びそれを受ける支柱の有無については不明である。

釉彩と施釉法 釉薬には緑・白・黄釉の外、藍釉もあり、筆・刷毛による塗り分け多彩施釉、単彩施釉（緑釉・黄釉）、白釉を掛けた後、緑釉を流し掛けする白釉緑彩施釉法のほか、白釉蠟抜き法もあり、黄冶窯と変わることはない。白色瓷土の化粧掛けは、黄冶窯でも普遍的に認められるが、黄冶窯では、胎に専ら瓷土を使い、主として紅色が浮かんだ素地について、極めて薄く化粧掛けを施すのが一般的である。当窯場では、素地が有色の陶胎用いるため、かなり分厚く施され、おそらく化粧汁桶に直接浸す方法で塗布したものであろう。

製品の特質 日常生活用具については、形だけでは黄冶窯産と区別がつかないほどよく似ている。低火度鉛釉陶の三彩・単彩の外に、雑器である高火度焼成の黒釉、黄色釉碗や鉢、器形から見て白釉、或いは内面に白釉、外面には黒釉を施す鉢の素地がある。中でも注目されるのは、三彩長方体陶枕であり、同一の四弁花紋を頂板に複数押捺するもの、欠損し文様の全容は定かでないが、宝相華のスタンプ紋が確認される破片も1点紹介されている。四弁花印花紋は大小2種あり、両種とも、大安寺講堂前庭出土のそれと同印と見られ注目される。陶枕は、文様だけではなく、無紋の側板の施釉のあり方も大安寺出土品とよく似ている。

三彩俑は1点（鴨抱俑）のみ紹介されているだけで、他は、殆ど剥げ落ちているが、三彩素地と見られる白土を塗ったものと、化粧を施さない陶俑がある。多くは中型の俑類であるが、高さが1m程に復原される天王俑や大型馬俑も存在する。馬俑及び騎馬俑は、陝西北部の皇帝陵園の皇族貴族墓出土のものに比べると、粗雑で平板な作りで、馬具の貼花飾り等の装飾も見られない。特異なのは、頭を剃った僧形の俑であり、墳墓に副葬するのではなく、同様な俑は、西安青龍寺から出土していることから、寺院に納置する羅漢像と考えられる。他の人物俑は、一般に役人、富豪層に仕える侍僕形象であり、彼ら

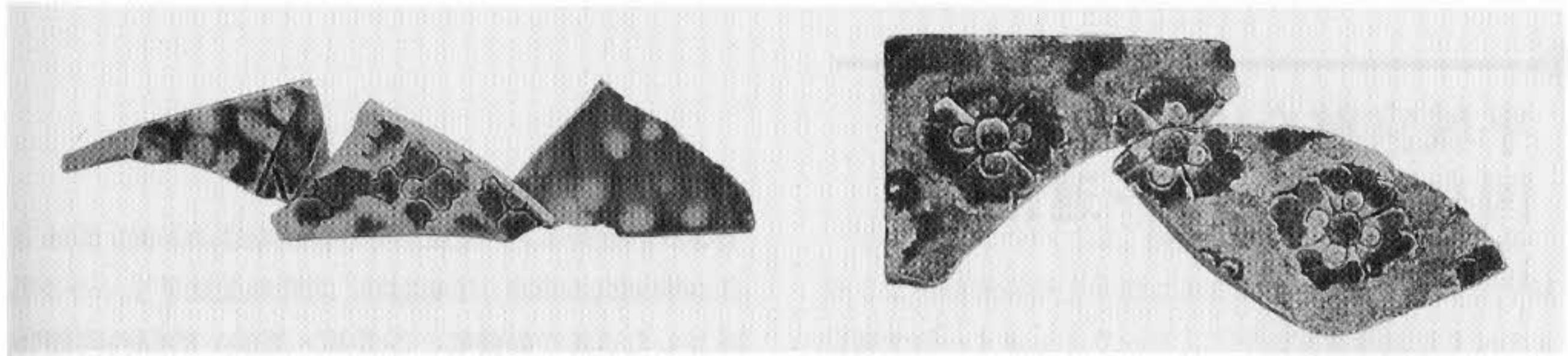


図21 西安旧飛行場跡地唐三彩窯出土 四弁花紋陶枕

の葬送に用いるものであろう。建築資材の宝相華紋磚についても寺院用と考えられることから、この窯場では、前述の日常生活用品、葬送用品外、寺院用品等を対象とする多角的な生産がおこなわれていたことが窺える。

窯跡発見の意義 新中国建国以来、西安・洛陽両都城周辺地区では、数多くの唐墓が発掘調査され、陝西省北部の皇帝陵を中心とする陵園地区の陪葬墓との違いなど唐代の墓葬の実体が明確になっていている。都城周辺四郊の墓域では、何らかの政治的な事情で陵園に陪葬されなかつた高級貴族の墓・氏族墓地も少数存在するが、大多数は、都城に住む下級貴族・役人・商人等の富裕層や一般庶民の墓である。唐代には、副葬品の数、法量、墓の規模・構造についての身分による送葬規制があった。皇帝の勅令があり、副葬品・墓地・墓園設備等、国から下賜、許可が下されない限りは、喪主の家族が、また縁のある人々の援助によって、それぞれの経済力に応じた葬儀一切を執りおこなわなければならなかつた。実際、都城外郊墓地では、副葬品の組み合わせや質量が異なる身分制と経済力を反映した様々な類型の葬送が見られる。こうした都市住民の需要に応ずるために、生産供給システムが確立していかなければならない。副葬品は、基本的には、市での売買或いは生産者に注文して入手したものであり、当然、市には、葬送用にも使う日常陶磁器を商う店、桶等の葬具を扱う店等が設けられ、また市に物資を供給する民間手工業工房が存在していたと考えられていた。かつて西市の調査では、三彩をはじめとする陶磁器店が存在したことが明らかになっていたが、今回、長安城内で待望の生産工房跡が発見され、葬送に関わる生産供給のシステムの一端が具体的に実証されることになった。

この窯跡を調査された姜捷氏の考察によると、窯跡の醴泉坊内における位置は、坊内に十字に配した道路で区画される4区画のうち、東北区画に想定され、西北区画にあった醴泉寺と道路・堀を隔し相対峙することから、この寺が窯工房を経営していた可能性を示唆している³⁾。詳しくは、報告書で論考するとの事であり、それを待ち

検討したいが、経営主は誰であり、不特定多数の都市住民を相手にした商業活動であることには変わりない。

このような、唐代の供給システムは、わが国に搬入された唐三彩の評価とも深く関わる。日本では、長らく唐三彩は、明器であり、もっぱら墓に収めるものと認識されてきたが、中国においては、唐三彩には、葬送用に使われるもの（鎮墓・守護墓俑・人物・動物俑・器材模型）と日常生活具があり、後者は、白瓷・青瓷等と同様に墓にも副葬されることもあり、また国内外に交易する商品でもあったというのが現在の共通の認識である。日本出土の唐三彩のうち、盛唐時期に属するもの多くは陶枕であり、他に三足炉（鋳）、型作り製の小型杯、瓶等があるが、何れも日常生活用品であり、市で売買され、誰でも入手可能な品であったことを認識した上で考察しなければならない。陶枕については、副葬された墓を見ると、独孤思貞等の高位貴族墓も知られるが⁴⁾、墓誌を伴わない非官人墓⁵⁾や僧侶墓もあり⁶⁾、特別高級品でもなかつたようである。当窯出土四弁花紋陶枕のうち、大きい四弁のものは、中国では揚州唐城跡、小型の四弁の例は、江蘇、陝西、河南地区で発見されている。河南の例は、征集品であるが、胎質から黄冶窯の産と目され、黄冶窯でも生産していた可能性が高い。大安寺出土の2種の唐三彩四弁花印花紋陶枕は、当窯出土品と同印と見られ、この窯場で作られた可能性は高いが、河南にも例があり、産地の同定には、印の同範の確認等、踏むべき所定の手続きを経て慎重におこなうべきであろう。

（巽 淳一郎）

註

- 1) 姜捷「唐長安醴泉坊の変遷と三彩窯跡」『考古与文物』2005-1。
- 2) 張國柱・李力「唐京城長安において初めて現れた三彩窯跡の手掛り—またしても民間収集家の重大発見—」『收藏』1999-78。呼林貴他「西安発見の唐三彩工房の性格に関する初步的考察」『文物世界』2000-1。
- 3) 註1に同じ。
- 4) 中国社会科学院『唐長安城郊隋唐墓』文物出版社、1980年。この資料は、四弁花紋を印した長方体枕を窯模型に再加工したもの。
- 5) 西安東郊韓林寨唐墓、洛陽安樂窯東崗墓、河南孟津県朝陽郷唐墓等。
- 6) 何國良「江西瑞昌唐代僧人墓」『南方文物』1999-1。